

## ESRI統計より：景気統計 景気動向指数研究会 について

経済社会総合研究所景気統計部研究専門職

佐合 功嗣

経済社会総合研究所景気統計部

横山 瑠里子

平成25(2013)年8月21日、第14回景気動向指数研究会が開催され、第15循環の景気の山は平成24(2012)年4月に暫定設定された。これに伴い、リーマンショック後の平成21(2009)年3月の谷以降の景気拡大は、37か月と戦後6番目の長さとなった。

本稿では、景気動向指数研究会とは何か、景気基準日付や景気動向指数の採用系列はどのように決められるのかについて整理し、景気動向指数の在り方について触れたい。

### 1. 景気動向指数研究会とは

景気動向指数は、経済活動において重要でありかつ景気に敏感に反応する指標の動きを統合することによって、景気の現状把握及び将来予測に資するために内閣府経済社会総合研究所景気統計部にて作成・公表している指標である<sup>1</sup>。同指数のパフォーマンスや主要経済指標の中心的な転換点である景気基準日付(景気の山・谷)の設定等について、統計学、経済学等の専門的見地から議論するため、経済社会総合研究所長が主催する研究会として、景気動向指数研究会(以下「研究会」)が設置されている。

景気動向指数のパフォーマンスに関しては、平成23(2011)年10月開催の第13回研究会において、採用系列の改定や新たな「外れ値」処理<sup>2</sup>によるCI算出方法の改善について議論された。景気の局面判断や各循環における経済活動の比較等を行う上で重要な景気基準日付に関しては、今夏、第15循環の暫定の山を設定す

るのに十分なデータが揃ったため、第14回研究会を開催し御議論いただいたところである。

### 2. 景気基準日付の設定について

景気の山の候補選定には、以下の①～③について検証を行う<sup>3</sup>。

- 1 波及度(Diffusion)：経済活動の収縮が、多くの部門に波及しているかを確認する。具体的には、ヒストリカルDI<sup>4</sup>の値が50%を下回る(過半の系列が下降となる)直前の月を景気の山の候補とし、さらに、山を経過した後に収縮がほとんどの経済部門に波及しているか確認する。
  - 2 量的な変化(Depth)：経済活動の落ち込みが軽微な場合、景気後退とみなすことはできない。このため、CI一致指数を参照し、顕著に下降したことを確認する。
  - 3 景気拡張・後退の期間(Duration)：景気拡張期間がきわめて短い場合、景気拡張とみなすことは適当ではない。具体的な基準として、景気の山の候補が、直前の景気の谷から5か月以上経過、かつ前の景気循環の山から15か月以上経過しているか確認する。
- 上記①～③を念頭に、第15循環の景気動向を振り返る。

まず、「①波及度」に関してヒストリカルDIの動きを確認すると、平成24(2012)年5月から同年11月までの期間は、50%を連続して下回っており、うち7月から9月は3か月連続で27.3%まで低下を記録している。このため、「経済活動の収縮が多くの部門に波及」の基準を満たすと考えられ、この期間の直前の月である平成24(2012)年4月が山の候補となった。なお、平成23(2011)年3月に50%を下回ったが、この時は11系列のうち5系列が拡張系列であり、かつ翌4月以降再び50%を上回ったため、「山を経過した後に収縮がほとんどの経済部門に波及」の基準を満たすためには不十分であった。

次に、「②量的な変化」に関して景気動向指数(CI一致指数)の動きを確認すると、平成21(2009)年3月の谷以降、景気は急速に回復し、途中、大震災による急

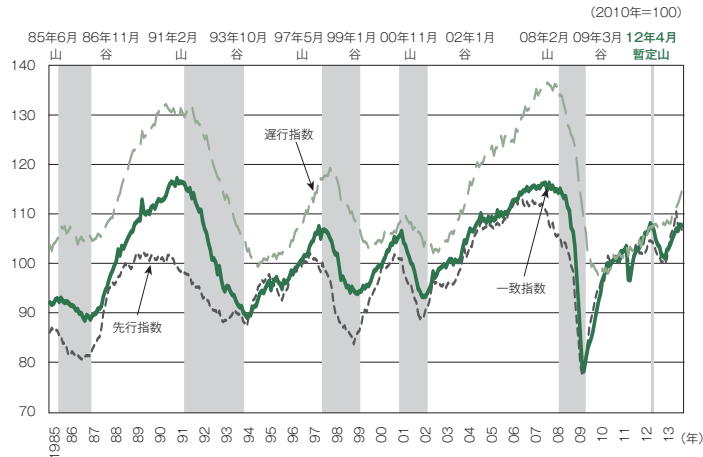
1 コンボジット・インデックス(CI)とディフュージョン・インデックス(DI、参考扱い)のそれぞれについて、先行指数、一致指数、遅行指数を算出している。

2 採用系列が個別に異常な変動を示すという前提に立ち、その変動を抑えることで、異常値に左右されない景気循環を抽出するための処理。

3 併せて参考指標(GDP、日銀短観、法人企業景気予測調査等)との整合性を確認する。

4 景気動向指数の一致指数を構成する各系列ごとに山と谷を設定し、谷から山に至る期間はすべて上昇(プラス)、山から谷に至る期間はすべて下降(マイナス)として、DIを算出したもの。

図1 景気動向指数(CI)の動き



(備考)

1. 内閣府「景気動向指数」により作成。
2. シャドー部分は景気後退期を示す。ただし、12年4月に暫定の山を設定しているが、それ以降については、まだ谷が設定されていないことから、シャドーは付けていない。

速な悪化があったものの、復興需要や政策効果の発現により景気の回復基調が続いた。しかしながら、平成24(2012)年3月をピークにCI一致指数は低下し始め、同年年央には外需の大幅な減少や政策効果の一巡などに伴って景気は急速に弱い動きとなった。暫定山候補の同年4月から11月までの7か月の間、CI一致指数の下降率の平均は6.0%となった。これは、過去5回の循環(第10循環～第14循環)の山から7か月間の下降率の平均(4.5%)と比べても大幅な落込みであり、「②量的な変化」の基準である「顕著な落込み」を満たす。

さらに、「③景気拡張・後退の期間」については、平成24(2012)年4月を山とした場合の景気拡張期間は37か月となり、「直前の谷から5か月以上経過、かつ前の景気循環の山から15か月以上経過」の基準を満たす。

景気動向指数研究会においては、このような点について議論を行い、平成24年4月を暫定の山と設定すべきとの意見で一致した。これを踏まえ、内閣府経済社会総合研究所長が、平成24(2012)年4月を景気の高点として暫定設定した。

### 3. 景気動向指数の採用系列見直し及び景気基準日付の確定について

今回の研究会においては第15循環の暫定谷を設定する予定である。また、次々回の研究会においては、第15循環以降の経済動向等も踏まえて現行指数を点検し、必要に応じて景気動向指数の改定を行うと同時に、新たな指数に基づいて第15循環の景気基準日付

を確定することとなる。

このため、景気統計部において暫定谷の設定及び採用系列の見直しに向けた作業を行っていく。採用系列の選定にあたっては、景気動向指数の構成指標のメルクマールを整理する必要がある。従来、採用系列の選定に用いる基準として、①経済的重要性、②統計的充足性、③景気循環との対応度、④景気の高点との関係、⑤データの平滑度、⑥統計の速報性が考慮されている。ただし、どの基準に重点を置くかについて現時点でコンセンサスと呼べるものはない。これは、過去の景気循環との対応度を重視しすぎると、指数は過去のデータに引きずられてしまい、直近の景気動向を早期に捉えづらくなることなどによる。また、採用系列数の変更も検討対象となる。現在、遅行指数の採用系列は6つであり、先行指数及び一致指数と比べて少なく、系列を加えることによりパフォーマンスが改善することも考えられる。

### 4. おわりに

第14回研究会において委員から「景気とは何か」を自問しながら見直しを続けていくべき旨、発言があった。経済社会の構造が変化すれば、景気を捉えるための手法も変える必要があり、不断の見直しが必要である。今後も、「景気」自体の意味について考えながら、景気統計作成業務に取り組んでまいりたい。

佐合 功嗣(さごう こうじ)

横山 瑠里子(よこやま るりこ)